

研究主題

第15回 東京都公立幼稚園・こども園5歳児の運動能力に関する調査研究

－ 小学校教育との円滑な接続を見据えた指導の工夫と改善 －

目次

第1	調査研究の背景とねらい	
1	調査研究の背景	44
2	調査研究のねらい	44
第2	調査の内容及び方法	
1	調査内容	45
2	調査方法	45
第3	運動能力調査の結果	
1	運動能力調査の結果の前回比較	45
2	運動能力調査結果における有意差検定の結果	46
3	今回の調査における運動能力の傾向	47
4	各種目別調査結果及び分析	47
第4	幼児の遊びに関する調査の結果と分析	
1	幼児の遊びに関する調査の結果	54
2	小学校と連携した取組に対する成果と課題	57
第5	合同研修の内容及び実施結果	
1	合同研修のねらい	58
2	合同研修の内容	59
3	合同研修の検証方法	59
4	合同研修の検証実施結果	59
5	合同研修を踏まえた小学校教育との円滑な接続に向けた方策	62
第6	調査研究のまとめと今後の課題	
1	調査のまとめ	63
2	小学校教育との円滑な接続に向けた指導の工夫と改善	63
3	今後の課題	63

1 研究の成果

- 東京都公立幼稚園・こども園5歳児の運動能力の傾向の提示
- 調査結果や実践事例に基づく幼児教育の更なる工夫・改善についての提示
- 小学校教育との円滑な接続に向けた研修について具体策をの提示

2 研究成果の活用

- 5歳児の実態を踏まえた環境構成等の保育の改善に活用
- 調査実施園の取組を参考とした幼稚園・こども園における保育の改善に活用
- 小学校との円滑な接続に向けた合同研修実施の参考資料として活用

第 1 調査研究の背景とねらい

1 調査研究の背景

昭和 50 年代前半、都市化の影響から運動能力の発達が十分でなかったり、遊びに意欲的に取り組めなかったりする幼児の増加が問題視されるようになった。そこで、東京都教育委員会では、幼児教育を推進する上で、幼児の運動能力の実態を捉えることが重要であると考え、昭和 55 年度から 3 年ごとに東京都公立幼稚園・こども園に在園する 5 歳児を対象に運動能力調査を実施してきた。

前回の平成 31 年度（2019 年度）の調査研究では、従来の運動能力調査の結果に加え、幼児が遊びや生活の中に多様な動きを取り入れることを目的に、幼児の遊びにおいて相対的に出現頻度の低い動きであった「ころがる」、「はう」といった動きを取り入れるための工夫についても紹介した。教員が幼児の経験の少ない動きを把握し、必要な援助をすることで、幼児が楽しく体を動かすための環境の構成や遊びの工夫について研究成果を示した。

一方で今後の課題の一つとして、「各園及び連携小学校との間で、幼児・児童の運動能力及び遊び・運動についての援助・指導の実態についての情報共有」を挙げており、幼小の接続という点に関しては、更なる研究の必要性が示された。

幼小の接続という点に関して、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携」を図り、「小学校教育との円滑な接続を図るよう努める」と示されている。

また、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。」と示されている。

これらのことから、令和 4 年度の調査研究では、従来の運動能力調査に加え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を取り入れた、幼小の教員間での円滑な接続の方策について研究していく必要があると考えた。

スポーツ庁が実施した「令和 3 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」によれば、「運動やスポーツをすることが「好き」又は「やや好き」と回答した東京都の児童について、男児の 50.3%、女児の 49.0%が「小学校入学前から体を動かすことが好き」と回答している。

また、「運動やスポーツをすることが「やや嫌い」又は「嫌い」と回答した東京都の児童について、男児の 41.0%、女児の 52.8%が「小学校入学前から体を動かすことが苦手」と回答している。全体の約半数の児童が、小学校入学前から運動やスポーツに関する認識が芽生えていることを考えれば、幼小の教員間での円滑な接続の方策を研究することにより、幼児教育における体を動かす際の工夫を小学校の授業改善に取り入れることができ、小学校入学以降の教育の充実を図ることができると考えた。

2 調査研究のねらい

本調査研究では、幼児の運動能力の傾向及び日常生活における実態を明らかにし、幼稚園における運動環境の工夫の事例を収集するとともに、幼小の教員間の円滑な接続に関する方策の在り方を提言することをねらいとする。

第 2 調査の内容及び方法

1 調査内容

(1) 運動能力調査

ア 25m走(主として敏捷性、瞬発力)

30mの直走路を走り、スタートから 25mの地点を通過したときの時間を測定する。

イ 立ち幅跳び(主として瞬発力)

両足同時に踏み切って跳び、踏み切り線と着地した地点との最短距離を測定する。

ウ ソフトボール投げ(主として瞬発力、調整力)

助走を行わずにボールを投げ、投球するラインと落下地点との距離を測定する。

エ 体支持持続時間(主として筋力、持久力)

二つの巧技台の間に立ち、両腕で体を浮かし、体を支えられる時間を測定する。

オ 両足連続跳び越し(主として調整力、敏捷性)

4 m 50 cmの間に置かれた 10 個の積み木を両足で同時に跳ぶ時間を測定する。

(2) 幼児の遊びに関する調査

調査実施園が工夫している幼児が体を動かすことを楽しむための遊びや小学校と連携した取組、幼児の日常生活における動作に関する課題、幼児の動きの傾向についてのアンケート調査を実施した。

2 調査方法

(1) 対象園

前回の調査研究で調査を実施している 63 園及び新規に 5 園を抽出し、合計 68 園を対象園とした。

(2) 調査対象

ア 調査対象園 (68 園) に在籍する 5 歳児 1,622 人

(都内全公立幼稚園・こども園に在籍する 5 歳児の 41.1%に当たる。)[令和 4 年度学校基本調査より]

イ 調査対象 5 歳児クラスの担任等

(3) 調査期間

令和 4 年 9 月から 11 月までの間で連続する 2 週間で実施した。

第 3 運動能力調査の結果

1 運動能力調査の結果の前回比較

前回(平成 31 年度)及び今回(令和 4 年度)の調査結果について、男女別及び年齢区分別の平均値をまとめると、以下のとおりである。(表 1、表 2 及び表 3)

表 1 前回及び今回の調査結果(全体平均・男女別)

年度	25m走(秒)		立ち幅跳び(cm)		ソフトボール投げ(m)		体支持持続時間(秒)		両足連続跳び越し(秒)	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
平成31年度	6.2	6.4	106.6	99.4	5.9	4.4	43.3	41.8	5.7	5.8
令和4年度	6.4	6.6	104.7	97.9	5.7	4.2	39.4	38.4	6.2	6.3
前回比	▲0.2	▲0.2	▲1.9	▲1.5	▲0.2	▲0.2	▲3.9	▲3.4	▲0.5	▲0.5

表 2 前回及び今回の調査結果(年齢区分 A・男女別)

年度	25m走(秒)		立ち幅跳び(cm)		ソフトボール投げ(m)		体支持持続時間(秒)		両足連続跳び越し(秒)	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
平成31年度	6.4	6.6	103.5	95.5	5.3	4.1	38.3	36.7	5.8	6.2
令和4年度	6.6	6.7	99.6	95.2	5.2	4.0	36.7	33.6	6.3	6.5
前回比	▲0.2	▲0.1	▲3.9	▲0.3	▲0.1	▲0.1	▲1.6	▲3.1	▲0.5	▲0.3

表 3 前回及び今回の調査結果（年齢区分 B・男女別）

年度	種目		25m走（秒）		立ち幅跳び（cm）		ソフトボール投げ（m）		体支持持続時間（秒）		両足連続跳び越し（秒）	
	性別		男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
平成31年度			6.1	6.4	108.5	101.9	6.2	4.5	46.2	45.1	5.6	5.6
令和4年度			6.3	6.5	109.4	100.1	6.1	4.4	41.9	42.3	6.1	6.1
前回比			▲0.2	▲0.1	0.9	▲1.8	▲0.1	▲0.1	▲4.3	▲2.8	▲0.5	▲0.5

《年齢区分》

この調査研究では、調査実施時における幼児の年齢を、以下のように二つに分けている。

- ・「年齢区分 A」（5 歳 0 か月から 5 歳 11 か月まで）
- ・「年齢区分 B」（6 歳 0 か月から 6 歳 11 か月まで）

《データ集計》

この調査では、測定値の平均値を小数第 1 位までの概数で表している。なお、未測定の数値については、除外して集計している。表 1、表 2 及び表 3 の「前回比」において、▲印のついた数値は、前回と比べて記録が下降したものを表している。

2 運動能力調査結果における有意差検定の結果

前回と今回の調査における有意差、今回の調査における男女間及び年齢区分間における有意差について検定を行った。結果は以下のとおりである。（表 4 及び表 5）

表 4 前回と今回の調査における有意差

比較した項目			種目	25m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ	体支持持続時間	両足連続跳び越し
年齢区分	A	男児		◎	○	×	×	◎
		女児		×	×	×	×	×
	B	男児		◎	×	×	○	◎
		女児		×	×	×	×	◎
男児全体				◎	○	×	○	◎
女児全体				×	×	○	○	◎

表 5 今回の男女間、年齢区分間における有意差

比較した項目	種目	25m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ	体支持持続時間	両足連続跳び越し
男児・女児間		○	◎	◎	×	×
年齢区分 A の男女間		×	◎	◎	×	×
年齢区分 B の男女間		×	◎	◎	×	×
男児の年齢区分 AB 間		◎	◎	◎	○	×
女児の年齢区分 AB 間		◎	◎	◎	◎	×

《有意差検定とは》

有意差とは、確かに差があり、それは偶然起こったものではないと言えるかどうかを検討した結果の差のことである。

この調査では、サンプル数、平均値、平均値の標準偏差から有意差検定を行っている。（* 1）

有意差検定結果は、比較をした数値間に偶然とは言えない差があるかどうかを記号で示している。

* 1 例えば、年齢区分 A の男児における前回と今回の有意差（表 4・1 段目）について、25m 走と両足連続跳び越しでは「99% の確率で偶然とは考えにくい差がある。」となり、ソフトボール投げと体支持持続時間では「今回のサンプル数においては、95% の確率で偶然とは考えにくい差があるとは考えられない。」となる。

《有意差の見方》

- ・◎印…「有意水準 1% で、有意差あり」
- ・○印…「有意差 5% で、有意差あり」
- ・×印…「有意差なし」

3 今回の調査における運動能力の傾向

前回と今回の調査について比較した結果（表 1、表 2 及び表 3）、年齢区分 B の男児の「立ち幅跳び」以外の種目が低下傾向を示した。全体平均では、女児の「25m 走」、男児の「ソフトボール投げ」、男女の「体支持持続時間」、男女の「両足連続跳び越し」が過去の調査の中で最も低い数値結果となった。

また、有意差検定の結果（表 4）では、男児は「ソフトボール投げ」以外の種目、女児は「25m 走」、「立ち幅跳び」以外の種目に有意差が認められた。「両足連続跳び越し」に関しては、男女共に 1% の有意水準で前回の調査結果から有意差があることが認められた。「体支持持続時間」についても、男女共に 5% の有意水準で前回の調査結果から有意差があることが認められた。

今回の調査のみにおける有意差検定の結果、「立ち幅跳び」及び「ソフトボール投げ」の時間を記録としない種目において、男女間で有意差があることが認められた。（表 5）

また、男女それぞれの年齢区分間では、「両足連続跳び越し」以外で有意差が認められ、年齢が上がるにつれて記録が上昇する状況が見られた。

4 各種目別調査結果及び分析

(1) 身長

ア 調査結果

表 6 身長の調査結果

性別	年齢区分	年齢区分 A (5 歳 0 か月～5 歳 11 か月)					年齢区分 B (6 歳 0 か月～6 歳 11 か月)					全体		
		平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準偏差	変動係数
男 児		112.3	5.0	4.5	133.4	93.7	115.3	4.9	4.2	131.6	102.0	113.9	5.2	4.5
女 児		111.0	4.9	4.4	131.8	94.4	114.3	4.8	4.2	130.4	99.5	112.8	5.1	4.5

《標準偏差》

標準偏差とは、平均の周りにおける資料のちらばりの度合いを数量的に表す量である。この数値が大きいくほど、平均値から遠く離れている測定値が多くあり、資料の散らばりが大きい。反対に、この数値が小さいほど、平均値の周りに測定値が集まり、資料の散らばりが小さい。

《変動係数》

変動係数とは、平均値に対する標準偏差の割合を表すもので、相対的な散らばりを表す指標である。標準偏差は測定単位の影響を受けるので単位の異なる資料の比較ができないが、変動係数は単位が異なる資料の散らばりの度合いを相互に比較できる。この値が大きいくほど、平均値の周りにおける資料の散らばりの度合いが大きい。

イ 全体平均値の推移

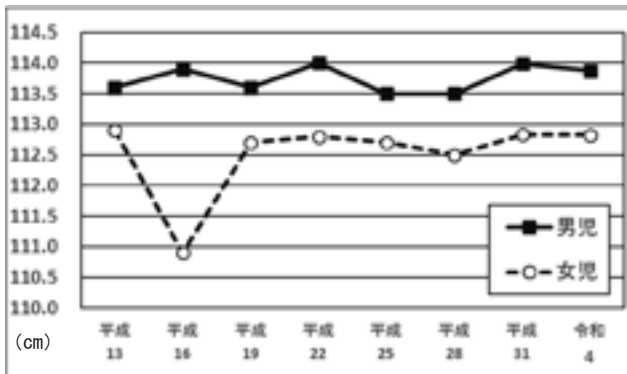


図 1 身長の全体平均値の推移 (過去 7 回)

ウ 年齢区分間の比較

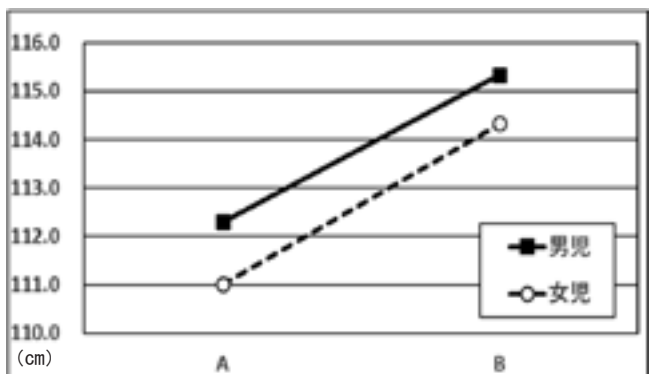


図 2 身長の年齢区分間の比較 (今回)

エ 身長傾向分析

全体平均値の推移は、平成 16 年度の調査を除き、平成 13 年度の調査から男女共にほぼ横ばいの傾向である。また、男児と女児との差は、平成 16 年度の調査を除き、約 1 cm 程度で推移している。(図 1) 今回の調査で、その差は 1.1 cm であった。(表 6)

年齢区分間の比較では、年齢区分 A と年齢区分 B との差は、男児が 3.0 cm、女児が 3.3 cm であった。(表 6) 男児と女児の変化の割合はほぼ同じであった。(図 2)

(2) 体重

ア 調査結果

表 7 体重の調査結果

性別	年齢 項目	年齢区分 A (5 歳 0 か月～5 歳 11 か月)					年齢区分 B (6 歳 0 か月～6 歳 11 か月)					全体		
		平均 (kg)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	平均 (kg)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	平均 (kg)	標準 偏差	変動 係数
男 児		19.3	3.0	15.4	39.6	12.6	20.4	3.3	16.1	37.2	13.5	19.9	3.2	16.0
女 児		18.9	3.2	16.8	40.1	12.4	19.8	2.9	14.8	41.2	14.1	19.4	3.1	15.9

イ 全体平均値の推移

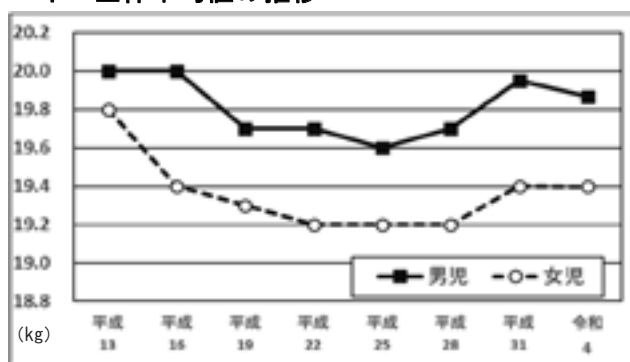


図 3 体重の全体平均値の推移 (過去 7 回)

ウ 年齢区分間の比較

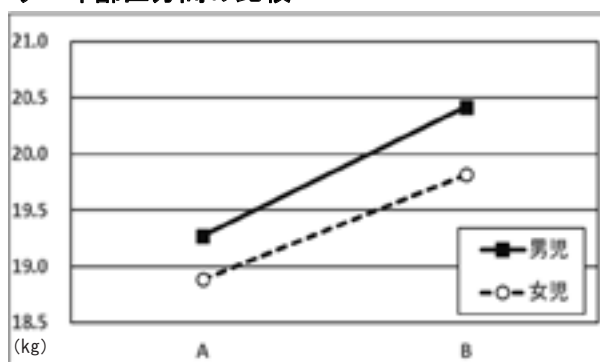


図 4 体重の年齢区分間の比較 (今回)

エ 体重傾向分析

全体平均値の推移では、平成 13 年度の調査から男女共にほぼ横ばいの傾向が見られる。また、男児と女児との差は、約 0.5 kg 程度で推移している。(図 3) 今回の調査でも、その差は 0.5 kg であった。(表 7)

年齢区分間の比較では、年齢区分 A と年齢区分 B との差は、男児が 1.1 kg、女児が 0.9 kg であった。(表 7) 男児と女児の変化の割合はほぼ同じであった。(図 4)

(3) カウプ指数

ア 調査結果

表 8 カウプ指数の調査結果

性別	年齢 項目	年齢区分 A (5 歳 0 か月～5 歳 11 か月)					年齢区分 B (6 歳 0 か月～6 歳 11 か月)					全体		
		平均	標準 偏差		最高値	最低値	平均	標準 偏差	変動 係数	最高値	最低値	平均	標準 偏差	変動 係数
男 児		15.2	1.5	9.7	27.0	12.1	15.3	1.7	10.8	23.4	11.9	15.2	1.6	10.3
女 児		15.3	1.7	11.3	29.5	12.0	15.1	1.5	9.9	25.0	12.1	15.2	1.6	10.6

《カウプ指数》

カウプ指数とは、乳幼児 (3 か月～5 歳) の発育状態の程度を表す指数である。肥満・痩身度の指標であり、一般にボディマス指数 (BMI) と呼ばれる指数と同じである。

$$\text{カウプ指数} = [\text{体重 (g)} / \{\text{身長 (cm)}\}^2] \times 10$$

満 5 歳児の幼児の場合、カウプ指数が 14.5 以上 16.5 未満であれば、発育状態は「標準」であり、14.5 未満では「やせぎみ」、16.5 以上では「太りぎみ」等と判定する。

イ カウプ指数の傾向分析

今回は、全体平均値が男女共に 15.2 であったため、発育状態は男女共に「標準」である。(表 8) 年齢区分間の比較では、年齢区分 A と年齢区分 B との差は、男児が 0.1、女児が 0.2 であった。

(表 8) 男女共に年齢による発育状態の差はないと言える。

(4) 25m走

ア 調査結果

表 9 25m走の調査結果

年齢 項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
男児	6.6	1.0	15.6	5.0	13.9	6.3	1.4	22.2	5.1	27.4	6.4	1.2	19.2
女児	6.7	1.2	17.3	5.2	22.5	6.5	0.9	13.6	5.0	16.8	6.6	1.0	15.5

イ 度数分布

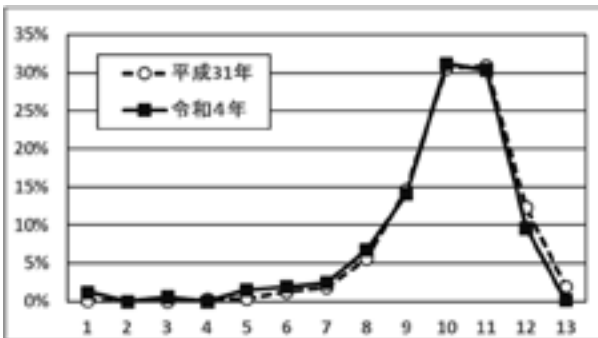


図 5 25m走の度数分布 (前回比較) (男児)

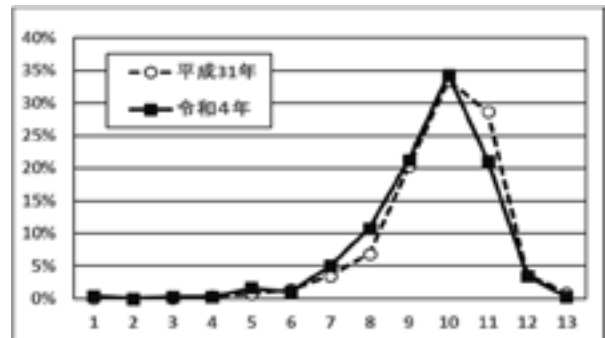


図 6 25m走の度数分布 (前回比較) (女児)

《25m走 級設定》(単位:秒)

1級	10.6～	2級	10.1～10.5 (代表値 10.3)	3級	9.6～10.0 (代表値 9.8)
4級	9.1～9.5 (代表値 9.3)	5級	8.6～9.0 (代表値 8.8)	6級	8.1～8.5 (代表値 8.3)
7級	7.6～8.0 (代表値 7.8)	8級	7.1～7.5 (代表値 7.3)	9級	6.6～7.0 (代表値 6.8)
10級	6.1～6.5 (代表値 6.3)	11級	5.6～6.0 (代表値 5.8)	12級	5.1～5.5 (代表値 5.3)
13級	～5.0				

男児は、前回の度数分布とほぼ同じ形状を示しているが、女児は 11 級の割合が減り、7 級及び 8 級の割合が増えた。(図 6) また、男児は平均値の属する 10 級の度数の割合が最も大きくなっているが(図 5)、女児は、最頻値が平均値の属する 9 級ではなく、10 級となっている。(図 6) ここからも、全体として低い級の割合が増えたことが分かる。

ウ 全体平均値の推移

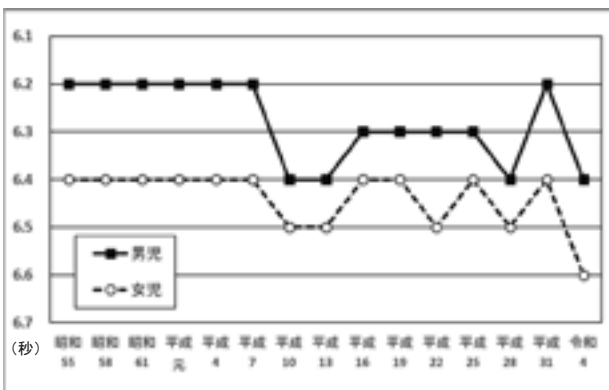


図 7 25m走の全体平均値の推移 (過去 14 回)

全体平均値は、男女共に横ばい傾向であるが、女児は今回の調査結果の数値が、過去の調査結果の中で最も遅い数値となった。(図 7)

第 1 回調査 (昭和 55 年度) の結果を 100 とした指数変化では、昭和 55 年度から平成 7 年度まで男女共に変化はなかったが、平成 10 年から男女共に低下した。(図 8) 前回調査で、男児は 100、女児

エ 指数変化の推移

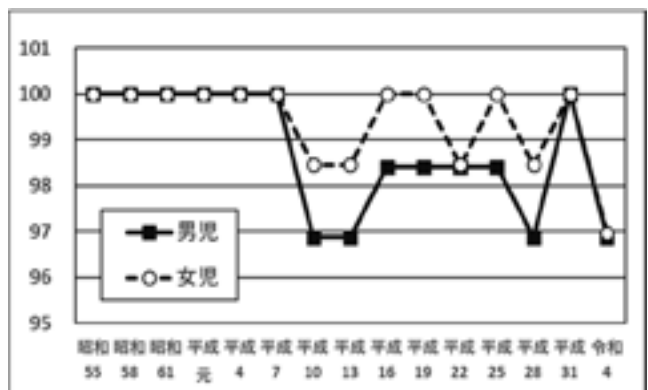


図 8 25m走の指数変化の推移 (過去 14 回)

は98.4に上昇した。今回調査では、男児は96.9、女児は97.0と男女共に再び低下したが、全体的には、男女共に第1回調査以降大きな変化は見られなかった。

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、男児が約0.3秒、女児が約0.2秒であった。(表9)

男児と女児の変化の割合はほぼ同じであった。(図9)

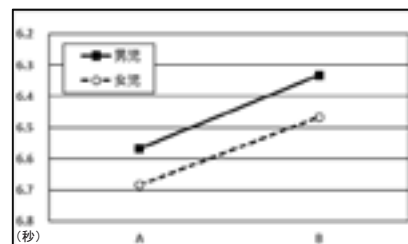


図9 25m走の年齢区分間・男女間比較(今回)

(5) 立ち幅跳び

ア 調査結果

表10 立ち幅跳びの調査結果

性別	年齢	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数
男児		99.6	22.9	23.0	184.0	20.0	109.4	19.4	17.7	165.0	26.0	104.7	21.7	20.7
女児		95.2	17.7	18.6	155.0	16.0	100.1	19.2	19.2	166.0	26.0	97.9	18.7	19.1

イ 度数分布

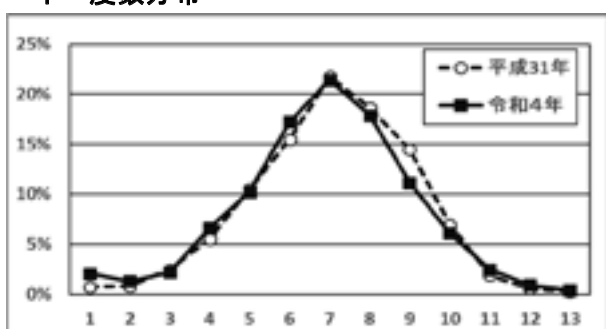


図10 立ち幅跳びの度数分布(前回比較)(男児)

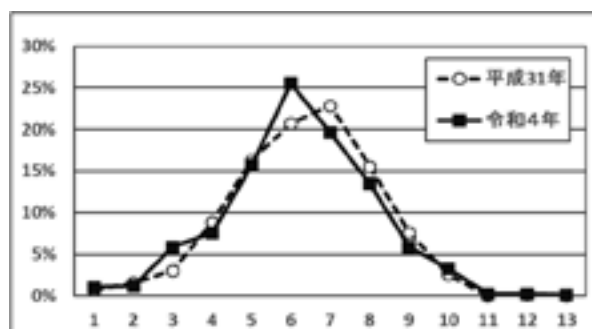


図11 立ち幅跳びの度数分布(前回比較)(女児)

《立ち幅跳び 級設定》(単位: cm)

1級	0～50 (代表値 25)	2級	51～60 (代表値 55)	3級	61～70 (代表値 65)
4級	71～80 (代表値 75)	5級	81～90 (代表値 85)	6級	91～100 (代表値 95)
7級	101～110 (代表値 105)	8級	111～120 (代表値 115)	9級	121～130 (代表値 125)
10級	131～140 (代表値 135)	11級	141～150 (代表値 145)	12級	151～160 (代表値 155)
13級	161～				

男児は、9級の割合が低下し、1級の割合が増加した。(図10) 女児は、最頻値が属する級が7級から6級に低下した。(図11)

ウ 全体平均値の推移

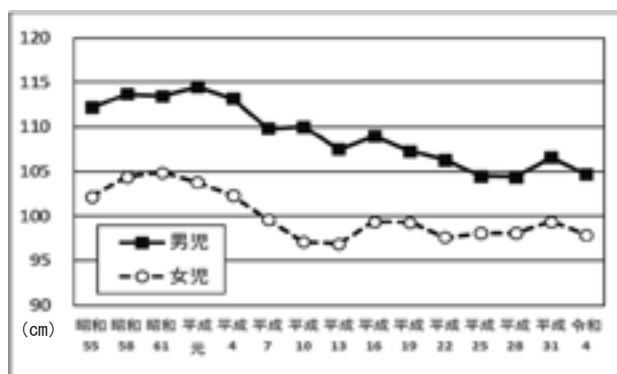


図12 立ち幅跳びの全体平均値の推移(過去14回)

エ 指数変化の推移

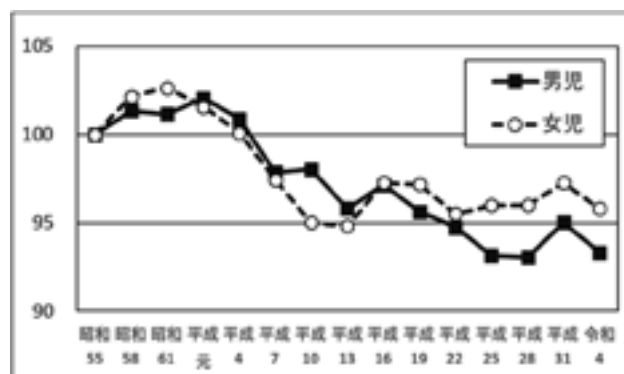


図13 立ち幅跳びの指数変化の推移(過去14回)

全体的には、第1回調査以降低下傾向にあるが、女児は平成10年度以降ほぼ横ばいの状態である。(図12) 男女共に前回調査では上昇したが、今回調査では再び低下した。

指数変化からも、平成4年度以降低下傾向であることが分かる。(図13) 今回調査では、男児が93.3、女児が95.8であった。

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、前回調査では男児が約 5.0 cm、女児が約 6.4 cmであったのに対し、今回調査では男児が約 9.8 cm、女児が約 4.9 cmであった。(表 10)

前回と異なり、年齢が上がるにつれて性差による数値の開きが大きくなると同時に、男児については、女児よりも変化の割合が大きくなった。(図 14)

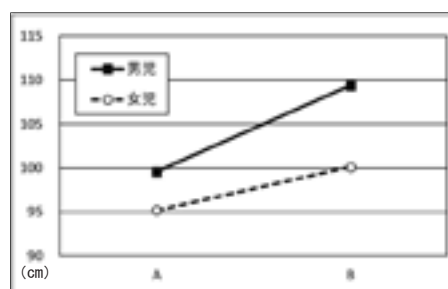


図 14 立ち幅跳びの年齢区分間・男女間の比較 (今回)

(6) ソフトボール投げ

ア 調査結果

表 11 ソフトボール投げの調査結果

性別	年齢 項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (m)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (m)	最低値 (m)	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (m)	最低値 (m)	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数
男	児	5.2	2.4	46.2	18.0	1.0	6.1	2.7	45.0	20.8	0.5	5.7	2.6	46.2
女	児	4.0	1.5	38.2	12.5	1.0	4.4	1.4	32.2	9.0	1.0	4.2	1.5	35.1

イ 度数分布

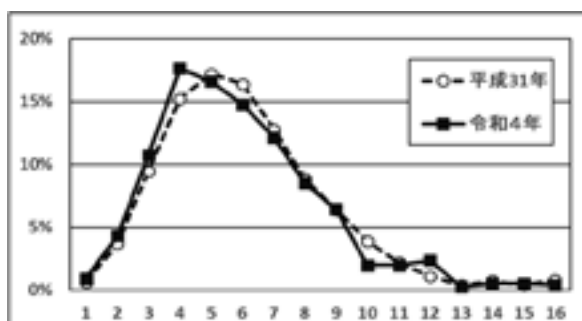


図 15 ソフトボール投げの度数分布 (前回比較) (男児)

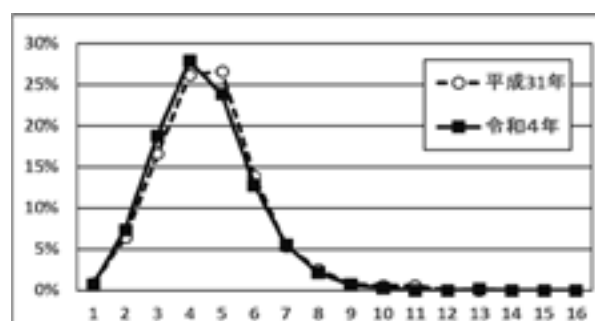


図 16 ソフトボール投げの度数分布 (前回比較) (女児)

《ソフトボール投げ 級設定》(単位: m)

1級	0 ~ 1.0 (代表値 0.5)	2級	1.1 ~ 2.0 (代表値 1.5)	3級	2.1 ~ 3.0 (代表値 2.5)
4級	3.1 ~ 4.0 (代表値 3.5)	5級	4.1 ~ 5.0 (代表値 4.5)	6級	5.1 ~ 6.0 (代表値 5.5)
7級	6.1 ~ 7.0 (代表値 6.5)	8級	7.1 ~ 8.0 (代表値 7.5)	9級	8.1 ~ 9.0 (代表値 8.5)
10級	9.1 ~ 10.0 (代表値 9.5)	11級	10.1 ~ 11.0 (代表値 10.5)	12級	11.1 ~ 12.0 (代表値 11.5)
13級	12.1 ~ 13.0 (代表値 12.5)	14級	13.1 ~ 14.0 (代表値 13.5)	15級	14.1 ~ 15.0 (代表値 14.5)
16級	15.1 ~				

男女共に、最頻値は平均値を含む級よりも低い級に含まれている。(図 15・16)

また、男女共に標準偏差の値に比べ、変動係数の値が非常に大きくなっている。(表 11) そのため、この種目では、多くの幼児が平均値に近い数値結果である一方で、一部個人差が大きい種目になっていると言える。

ウ 全体平均値の推移

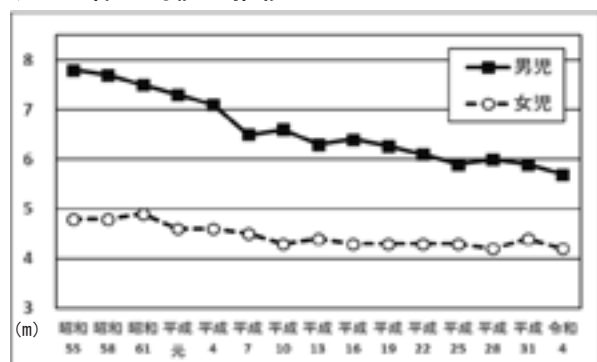


図 17 ソフトボール投げの全体平均値の推移 (過去 14 回)

エ 指数変化の推移

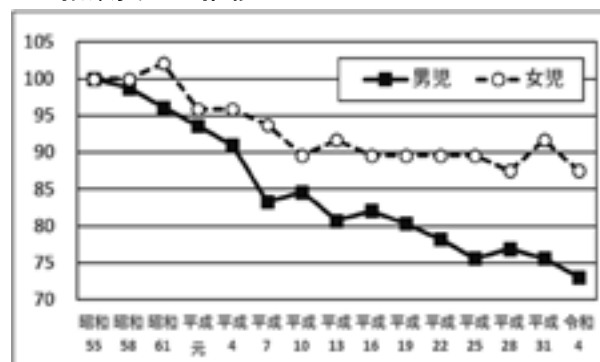


図 18 ソフトボール投げの指数変化の推移 (過去 14 回)

全体平均値は、第 1 回調査以降、男児は低下傾向、女児はほぼ横ばいで推移している。(図 17) 男児は、今回の調査結果が過去の調査結果の数値の中で最も低い数値となった。

また、指数変化からも男児が第 1 回調査以降、低下傾向であることが分かる。(図 18) 男児は、今回の数値が 73.1 であった。女児は、前回の数値が 91.7 と上昇したが、今回は 87.5 と平成 28 年度と同じ数値となった。

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分間の差は、今回の調査では、男児が約 0.9 cm、女児が約 0.4 cm となり、前回の調査と同じ値になった。(表 11)

また、男児については、女児よりも変化の割合が大きいく、年齢が上がるにつれて、男児と女児の数値の開きが大きくなった。(図 19)

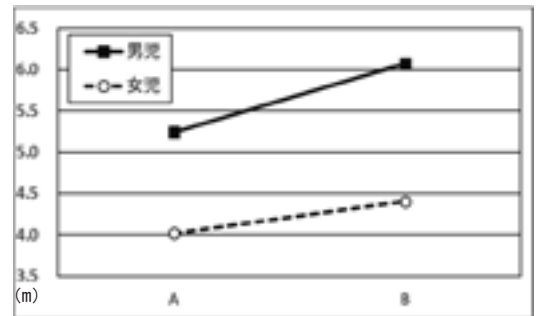


図 19 ソフトボール投げの年齢区分間・男女間の比較 (今回)

(7) 体支持持続時間

ア 調査結果

表 12 体支持持続時間の調査結果

性別	項目	年齢区分A (5歳0か月～5歳11か月)					年齢区分B (6歳0か月～6歳11か月)					全体		
		平均 (秒)	標準偏差	変動係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準偏差	変動係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準偏差	変動係数
男児		36.7	32.6	88.7	180.0	0.0	41.9	32.2	76.8	180.0	1.0	39.4	32.4	82.3
女児		33.6	26.0	77.3	180.0	1.0	42.3	32.5	76.8	240.0	0.0	38.4	30.0	78.3

イ 度数分布

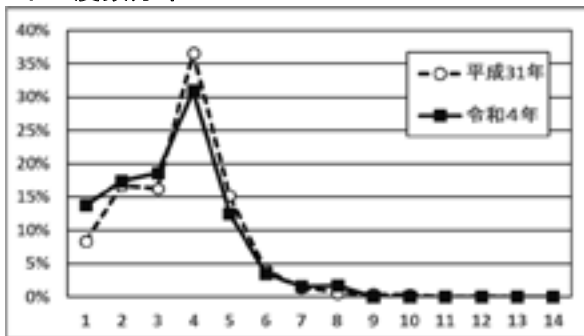


図 20 体支持持続時間の度数分布 (前回比較) (男児)

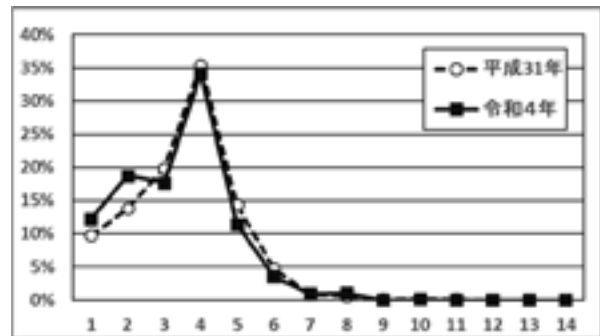


図 21 体支持持続時間の度数分布 (前回比較) (女児)

《体支持持続時間 級設定》(単位: 秒)			
1 級	0～10 (代表値 5)	2 級	11～20 (代表値 15)
3 級	21～30 (代表値 25)	4 級	31～60 (代表値 45)
5 級	61～90 (代表値 75)	6 級	91～120 (代表値 105)
7 級	121～150 (代表値 135)	8 級	151～180 (代表値 165)
9 級	181～210 (代表値 195)	10 級	211～240 (代表値 225)
11 級	241～270 (代表値 255)	12 級	271～300 (代表値 285)
13 級	301～330 (代表値 315)	14 級	331～

男児は、平均値が属する 4 級の割合が低下し、3 級及び 1 級の割合が増加した。(図 20) 女児は、ほぼ同じ形状であるが、2 級及び 1 級の割合が増加した。(図 21)

また、標準偏差、変動係数の値が共に大きくなっていることから、平均値からの散らばりが大きくなっている。(表 12) ソフトボール投げと同様に、個人差が大きい種目であると言える。

ウ 全体平均値の推移

第 1 回調査以降、男女共に低下傾向であり、今回の調査結果は、過去の調査結果の中で男女共に最も低い数値結果となった。(図 22) 平成 10 年度から平成 25 年度までは、男女共にほぼ横ばい傾向であったが、平成 28 年度から再び低下傾向となっている。

エ 指数変化の推移

男児が 48.7、女児が 48.2 となり、第 1 回調査結果と比べ半分以下の数値結果となった。(図 23)

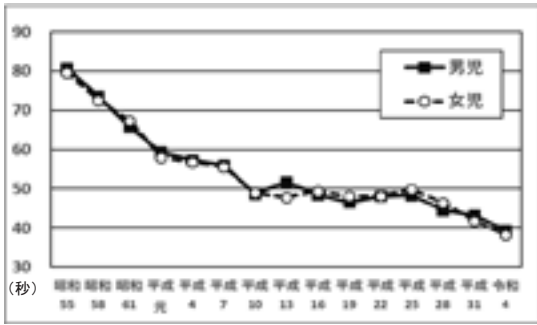


図 22 体支持持続時間の全体平均値の推移（過去 14 回）

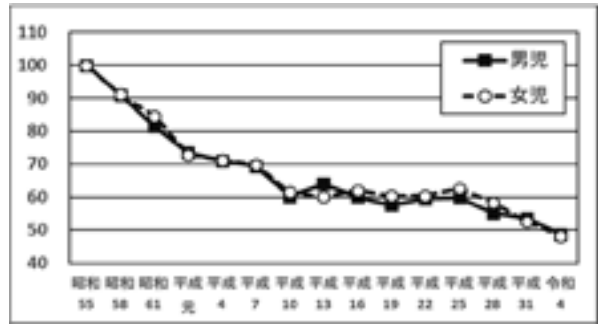


図 23 体支持持続時間の指数変化の推移（過去 14 回）

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分の差は、前回の調査では、男児が約 7.9 秒、女児が約 8.4 秒であったのに対し、今回の調査では、男児が約 5.2 秒、女児が約 8.7 秒と年齢区分間での差があることが分かる。（表 12）

また、年齢が上がるにつれて男児と女児の数値の差がなくなり、年齢区分 B において男女の数値が逆転する傾向は、平成 28 年度調査においても同様の傾向が見られた。（図 24）

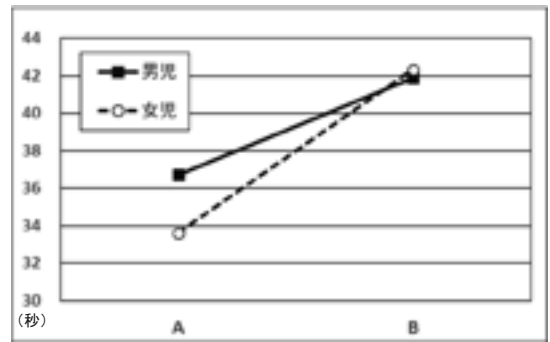


図 24 体支持持続時間の年齢区分間・男女間の比較（今回）

(8) 両足連続跳び越し

ア 調査結果

表 13 両足連続跳び越しの調査結果

性別	項目	年齢区分 A (5 歳 0 か月～5 歳 11 か月)					年齢区分 B (6 歳 0 か月～6 歳 11 か月)					全体		
		平均 (秒)	標準偏差	変動係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準偏差	変動係数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平均 (秒)	標準偏差	変動係数
男 児		6.3	2.5	40.2	3.2	22.0	6.1	2.6	43.0	3.4	28.9	6.2	2.6	41.7
女 児		6.5	2.5	38.2	3.5	19.5	6.1	3.2	51.6	3.7	48.0	6.3	2.9	45.7

イ 度数分布

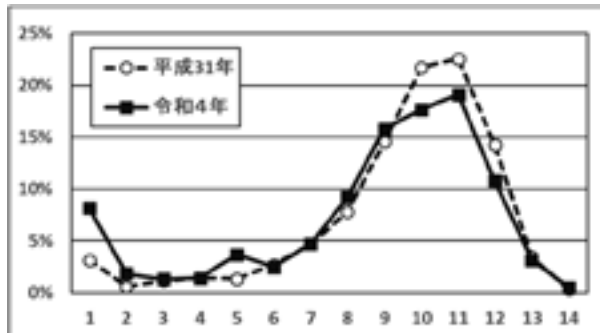


図 25 両足連続跳び越しの度数分布(前回比較) (男児)

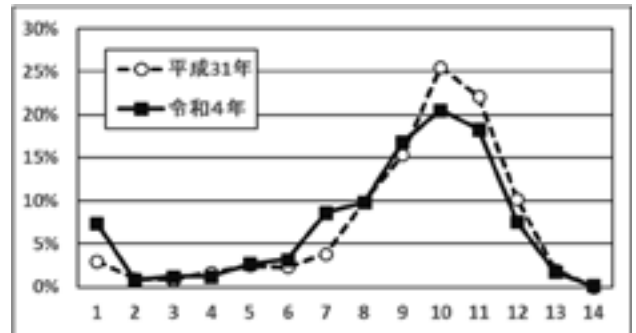


図 26 両足連続跳び越しの度数分布(前回比較) (女児)

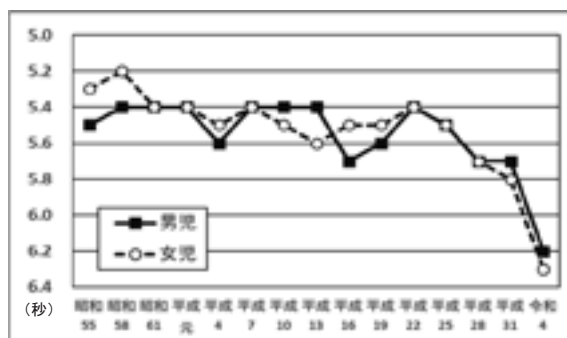
《両足連続跳び越し 級設定》(単位：秒)

1 級 9.6～	2 級 9.1～9.5 (代表値 9.3)	3 級 8.6～9.0 (代表値 8.8)
4 級 8.1～8.5 (代表値 8.3)	5 級 7.6～8.0 (代表値 7.8)	6 級 7.1～7.5 (代表値 7.3)
7 級 6.6～7.0 (代表値 6.8)	8 級 6.1～6.5 (代表値 6.3)	9 級 5.6～6.0 (代表値 5.8)
10 級 5.1～5.5 (代表値 5.3)	11 級 4.6～5.0 (代表値 4.8)	12 級 4.1～4.5 (代表値 4.3)
13 級 3.6～4.0 (代表値 3.8)	14 級 ～3.5	

男女共に、10 級及び 11 級の割合が低下し、1 級の割合が増加している。（図 25・26）

また、変動係数の値が大きくなっていることから、「ソフトボール投げ」及び「体支持持続時間」と同様に個人差の大きい種目であることが言える。（表 13）

ウ 全体平均値の推移



エ 指数変化の推移

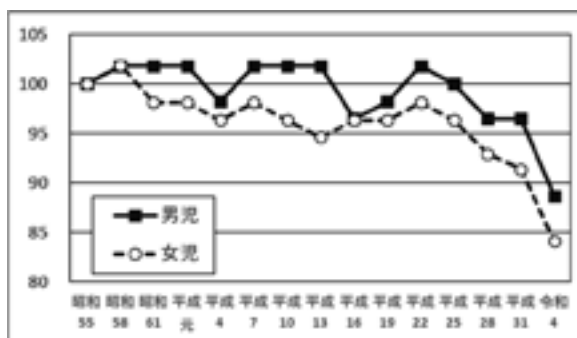


図27 両足連続跳び越しの全体平均値の推移（過去14回） 図28 両足連続跳び越しの指数変化の推移（過去14回）

全体平均は、第1回調査以降、男女共にほぼ横ばいで推移してきたが、今回の調査では大幅に低下し、過去の調査結果の中で最も低い数値となった。（図27）

また、指数変化では、前回の調査結果が過去の調査で最も低かったのに対し、今回の調査では更に低下し、男児が88.7、女児が84.1と9割を下回った。（図28）

オ 年齢区分間・男女間の比較

年齢区分の差は、前回の調査では、男児が約0.2秒、女児が約0.6秒であったのに対し、今回の調査では、男児が約0.2秒、女児が約0.4秒であった。（表13）

また、年齢区分Aでは男児と女児の数値の差が大きいが、年齢区分Bでは男児と女児の数値の差が小さくなる傾向は前回調査でも見られた。（図29）

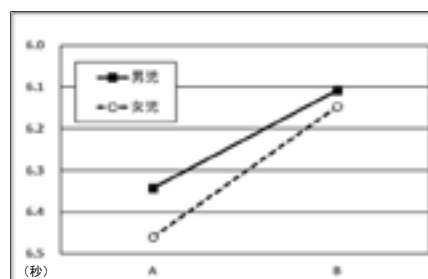


図29 両足連続跳び越しの年齢区分間・男女間の比較（今回）

女児の変化の割合が男児よりも大きくなった。

第4 幼児の遊びに関する調査の結果と分析

運動能力調査と併せて、幼児が体を動かすことを楽しんでいる遊び、幼児の日常生活における動作に関する課題、運動能力調査の数値結果からみられる幼児の動きに関する傾向等を調べるために、「幼児の遊びに関する調査」を実施した。

1 幼児の遊びに関する調査の結果

(1) 運動能力調査の結果に基づく調査対象幼児

この調査において、「運動能力調査の数値が上位の幼児」とは、運動能力調査5種目全ての数値結果が、各園における平均値よりも上回っている幼児のことであり、「運動能力調査の数値が下位の幼児」とは、運動能力調査の結果を基に、各園においてクラス担任等が調査対象として選出した幼児のことである。各調査対象幼児の数は、以下のとおりである。

	合計数	全体における割合
運動能力調査の数値が上位の幼児	109人（男児79人、女児30人）	6.7%
運動能力調査の数値が下位の幼児	136人（男児71人、女児65人）	8.4%

(2) 運動能力調査結果の数値別の動きの出現傾向比較

この調査では、運動能力の数値別に幼児の「楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる動き」を30種類に分類し、集計した。（図30）

運動能力の数値が上位の幼児について、「動き」の出現頻度を前回の調査における運動能力の数値が上位の幼児と比較するために、今回の調査における出現傾向が高い順に並べてグラフにまとめた。前回の調査と比較して、出現頻度が大きく異なる動きは見られなかった。（図31）

《「動き」について》

本調査における動きは、幼児が自ら選んだ遊びをしている様子を観察・調査した結果から、財団法人体育科学センターが提案した基本的動作及び、「平成 17 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I 幼少期に身につけておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究」、NHK「からだであそぼ」において使用された基本動作のそれぞれを参考として作成した。

- | | | | |
|--------------|---------------|----------|------------|
| 1. たつ・しゃがむ | 2. おきる・ねる | 3. まわる | 4. ころがる |
| 5. くむ・つみかさなる | 6. わたる | 7. ぶらさがる | 8. のぼる |
| 9. おりる | 10. とびおりる | 11. はう | 12. あるく |
| 13. はしる | 14. とぶ・はねる | 15. かわす | 16. くぐる |
| 17. もつ・はこぶ | 18. おす | 19. ひく | 20. つかむ |
| 21. なげる | 22. うける・うけとめる | 23. わたす | 24. ふる |
| 25. まわす | 26. つむ・つみあげる | 27. ころがす | 28. ほる・けずる |
| 29. うつ・たたく | 30. ける | | |

※ 動きの要素については、「はしる」、「なげる」等、よく見られることが予想されるものを抽出したほか、「およぐ」、「もぐる」等、特定の季節に影響される動作を省くなど、本調査の調査委員会で検討し、決定した。

図 30 幼児が楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる「動き」の分類

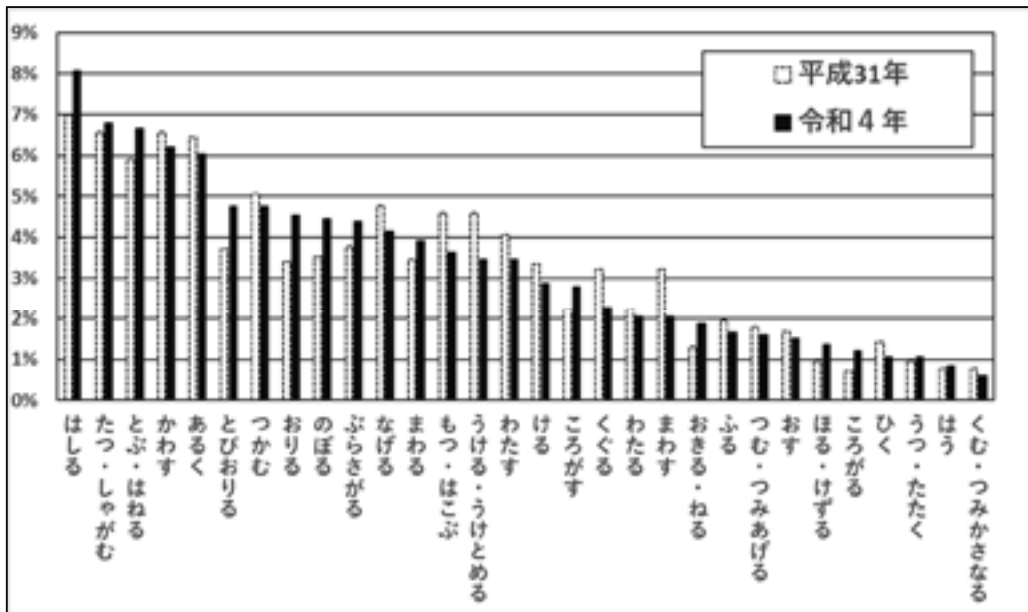


図 31 運動能力の数値が上位の幼児が楽しんで体を動かしている遊びに含まれる「動き」の出現傾向（前回比較）

細かく分析すると、今回の調査では、「はしる」が前回と同様に最も出現頻度が高く、その割合も増加した。一方、「くぐる」、「もつ・はこぶ」、「うける・うけとめる」、「まわす」が前回に比べ低下している。これらの動きは、道具を扱う遊びを想起させることから、前回調査以降に発生した感染症対策として、道具を介して幼児同士が接触することを回避した園が多かったのではないかと推測される。実際に、感染症対策についての記述式アンケートにも「一つのボールを複数人で共用することを避けていた」、「リレーやドッジボールでも、手にするものが相手の手に渡すことになるのは避けた」等の回答があり、調査実施園で行われた感染症に対する取組が、動きの出現頻度にも影響を及ぼしたのではないかと考える。

また、今回の調査においては、運動能力の数値が上位と下位の幼児における「楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる動き」について比較を行うために、それぞれの「動き」の出現傾向を、運動能力の数値が上位の幼児の出現傾向が高い順に並べてグラフにまとめた。（図 32）

運動能力の数値が上位の幼児の「動き」の出現傾向と、数値が下位の幼児の「動き」の出現傾向は、高い動きと低い動きについて、概ね同様の傾向が見られた。

一方で、運動能力の数値が下位の幼児は、「たつ・しゃがむ」、「あるく」、「はしる」の三つの動きだけで全体の約 3 割を占めており、運動能力の数値が上位の幼児に比べて動きに偏りがあると言える。このことから、普段の遊びにおいて動きに偏りが少なく多様な動きを経験することと、運動能力の数値には関係性があると推測できる。

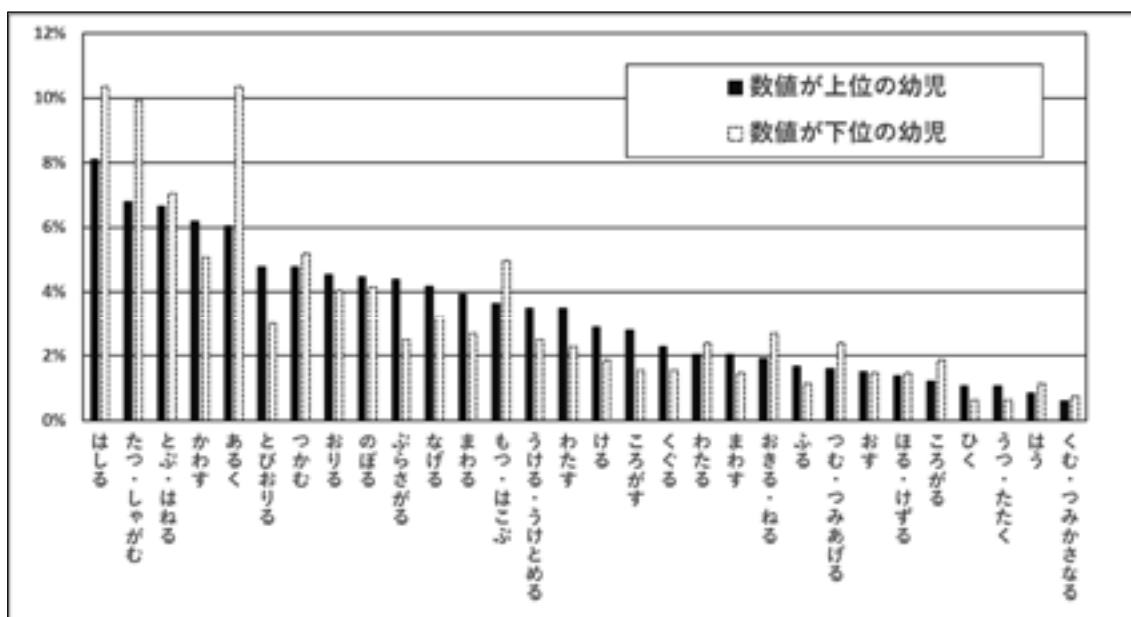


図 32 運動能力の数値が上位と下位の幼児が楽しんで体を動かしている遊びに含まれる「動き」の出現傾向の比較

(3) 調査対象幼児の日常生活における動作の傾向

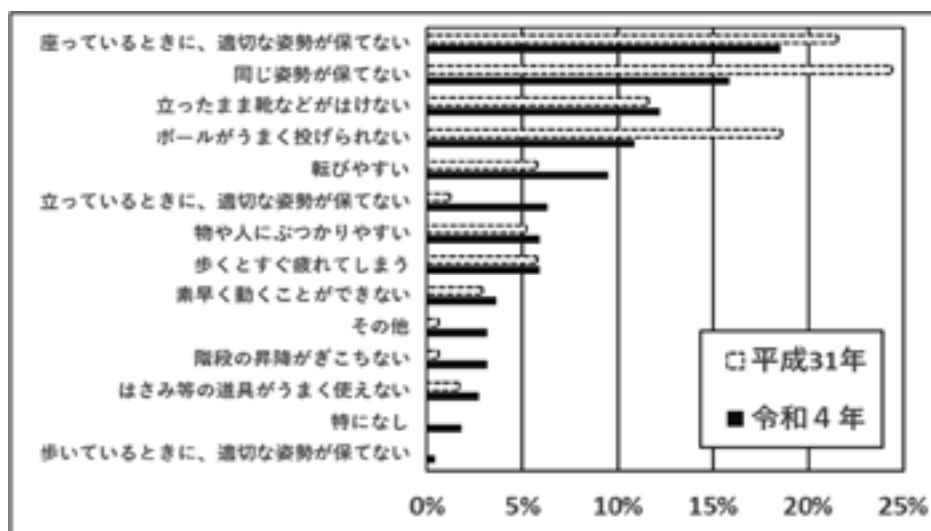


図 33 教員が感じる幼児の日常生活に必要な動作や身のこなしについて（前回比較）

幼児の日常生活に必要な身のこなしなどについて、調査実施園で教員が感じていることを三つ以内で回答してもらい、前回の調査の結果と比較するために、今回の調査結果で割合が高い順に並べてグラフにまとめた。(図 33) 今回の調査では、前回調査から「特になし」の項目を追加した。

前回調査では、「同じ姿勢が保てない(24.4%)」、「座っているときに、適切な姿勢が保てない(21.5%)」、「ボールがうまく投げられない(18.6%)」の三つの項目で約 65%を占めていたが、今回の調査では、「座っているときに、適切な姿勢が保てない(18.6%)」が最も高く、他の項目同士の差が小さくなったことから、前回調査に比べ、より多くの課題を教員が感じていると言える。特に「立っているときに、適切な姿勢が保てない」が前回調査では 1.2%だったのに対し、今回の調査では 6.3%と大きく増加した。姿勢やバランス感覚について課題が大きくなったと言える。

(4) 調査対象幼児の日常生活における動作の傾向が現れる原因

幼児の日常生活に必要な身のこなしの調査結果について、教員が考えるその傾向が現れる原因を記述式で回答してもらい、項目ごとに整理してグラフにまとめた。

主な原因として、「体幹が弱い」、「家庭での体を動かすことの減少」、「運動時間の減少」、「多様な動きの減少」の四つの項目で、全体の約 8 割となることが分かった。

(図 34)

このような原因は多くの幼稚園でも同様であると考えられるため、それぞれの園が原因に対して改善を目的とした取組を継続的に行っていく必要がある。

それにより、運動能力の数値結果も改善に向かうと考える。

(5) 日常生活における動作の傾向に対する各園の取組内容

日常生活における動作の傾向の原因に対する調査実施園の改善を目的とした取組内容について、各調査実施園の教員が記述式で回答したものを表にまとめた。(表 14)

表 14 日常生活における動作の傾向に対する改善を目的とした調査実施園の取組内容例

原因	調査実施園での取組
体幹が弱い	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの中で雑巾掛けをしたり大きなものを運んだりして、自然と鍛えられる。 片足で立ってみたり、柔軟体操を取り入れたりしている。
家庭での体を動かすことの減少	<ul style="list-style-type: none"> 学年便りや園内掲示を通して、簡単に取り組める活動を伝えている。 家庭で簡単にできる運動遊びを紹介したり、園で一緒に行ったりしている。
運動時間の減少	<ul style="list-style-type: none"> 毎朝、リズム体操の時間を設けている。 楽しく体を動かせるよう、コーディネーショントレーニングを取り入れている。
多様な動きの減少	<ul style="list-style-type: none"> けんけんばやつま先立ち歩き、運動カードの動きなどを生活の中で取り入れている。 園内で、けんけんばができるように、床に足型のシールを貼っている。

これら以外にも、調査実施園においては様々な工夫を凝らすことで、幼児の動作の傾向に対して改善策を講じていることが分かった。

2 小学校と連携した取組に対する成果と課題

(1) 小学校と連携した取組の実態

今回の調査では、幼小の円滑な接続の観点から、小学校と連携した取組についても調査した。調査実施園が小学校と連携している取組について、記述式で回答したものをまとめた。(図 35)

小学校と連携した取組については、「幼児と児童の交流 (38.8%)」が最も高く、次いで「教員同士の情報交換 (23.5%)」が高かった。

一方で、幼小の円滑な接続に向けた教員同士の「合同研修等の実施」を行っている園は 10.6% にとどまっており、幼小の円滑な接続に向けては、幼稚園における教育実践を、幼小の教員間で共有するなどの機会の設定が大切と考える。

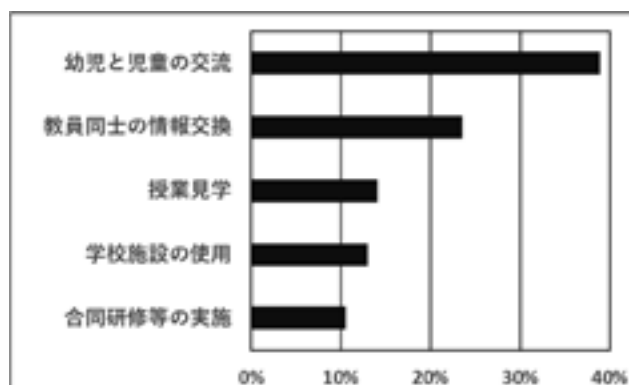


図 35 調査実施園における小学校と連携した取組実態

(2) 小学校と連携した取組の成果

幼稚園教員が考える小学校と連携した取組を行うことで得られた成果を、一部抜粋して表にまとめた。
(表 15)

表 15 幼稚園教員が考える小学校と連携したことによる成果

小学校と連携したことによる成果
小学生にあこがれの気持ちをもちながら、速く走れるようになりたい、ドッジボールで強くなりたいという思いが強くなり、運動遊びに積極的に取り組むようになってきている。
小学校に行って一年生と交流をし、小学校施設や授業見学をしたことで、就学に向けての期待を言葉にする幼児が増えた。また、「もうすぐ一年生になるから」と普段以上の力を出そうとする場面が増えている。
小学校の教員と合同の研修を行ったことで、教員同士の距離が近くなり小学校の施設利用についてや幼小の交流活動計画などの打ち合わせをしやすくなった。
園に通っていた幼児のその後の成長に触れたり、一・二年生が困っていること、つまづくポイント等を共有することができるため、園を修了した後の発達を見通した具体的な指導の検討につながった。

幼児が小学校に対してあこがれや見通しをもてるようになり、普段の生活で意欲的に取り組むようになったという回答が多かった。また、教員間のつながりをもつことで、保育の改善につながりやすくなったという回答も多かった。

(3) 小学校と連携していく上での課題

幼稚園教員が、これまでの小学校と連携した取組を行う中で感じた課題を、一部抜粋して表にまとめた。(表 16)

表 16 幼稚園教員が考える小学校と連携する上での課題

小学校と連携する上での課題
幼稚園の教員と小学校の教員が、どんなことをしているのかを知るために、幼稚園の様子、小学校の授業の様子などを見る機会を増やすことが課題である。
幼稚園と小学校の教員が互いの様子を知ること、幼稚園教員がどのようなことをねらって保育を行っているかを、小学校教員が知ること課題がある。
幼稚園と小学校の生活リズムが異なるため、教員同士で時間を合わせたり、交流の時間を作ることが課題である。
幼稚園教育について、小学校の教員に理解をしてもらうことに課題がある。

保育や授業等、幼小の教員がそれぞれ行っている教育活動を、互いに見合う機会が不足していることが課題であるという回答が多かった。また、小学校の授業時間との兼ね合いから、連携を依頼することに躊躇してしまうという回答もあった。全体的に、小学校との連携を行うことで、互いの教育活動を伝え合いたい、時間の確保や方法の確立について課題を感じていることが分かった。

第 5 合同研修の内容及び実施結果

これまでの調査結果を踏まえ、今回の調査研究では、幼小の円滑な接続を見据えた指導の工夫と改善の方策の一環として、幼小の教員を対象にした合同研修計画を立案することとした。互いの教育実践を観察する活動を取り入れつつ、幼小の教員にとって、よりよい指導改善につながる研修形態について研究した。

1 合同研修のねらい

幼稚園教員と小学校教員が、幼小の円滑な接続に向けた気付きや思考を引き出せるようになるために、互いの教育内容や方法、教育観、指導観を共有するとともに、発達の連続性や幼稚園教育及び小学校教育への理解を深める。

2 合同研修の内容

本研究で実施した合同研修は、以下の四場面で構成する。

(1) 観察

幼稚園教員と小学校教員は、観察対象幼児1名が遊んでいる様子を観察し、観察中にみられた幼児の姿について観察シートに記入する。

(2) 共有

幼稚園教員と小学校教員は、観察対象幼児に表出した力を、それぞれ異なる色の付箋に記入する。幼稚園教員は、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の視点も記入することで、幼稚園教員が子供を見取る方法を小学校教員に伝えられるようにする。付箋に記入した後は、幼児の遊びの場面ごとに区切られた模造紙に、自身が書いた内容を発表しながら付箋を貼る。

(3) 協議

貼られた付箋の内容が生かすことのできる小学校教育の場面について協議する。小学校教員が主体となり、小学校教育へのつながりを幼稚園教員に伝えながら共に協議することで、幼稚園教員は小学校教育への学びの連続性を認識できる。

(4) 省察

合同研修を通して学んだことや、明日からの指導に生かすことができることについて振り返り、振り返りシートに記入する。

3 合同研修の検証方法

(1) 検証実施園

荒川区立南千住第二幼稚園、江東区立つばめ幼稚園、世田谷区立八幡山幼稚園

(2) 検証実施参加者

検証実施園の教員及び令和4年度東京都教員研究生の小学校籍の教員

(3) 検証実施期間

令和4年11月中旬から下旬

4 合同研修の検証実施結果

毎回課題事項が挙がったが、その都度修正しながら合同研修の方法を改善していくことで、よりよい研修形態を明らかにすることができた。以下に、各検証実施園での検証成果と課題をまとめた。

なお、合同研修中に作成した付箋が貼られた模造紙に関しては、一部抜粋して表として掲載する。(表17・19・21)

各表の★印は幼稚園教員が作成した付箋の内容で、●印は小学校教員が作成した付箋の内容を表している。【 】は、共有の際に幼稚園教員が付箋に記入した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を表している。□は、協議の際に小学校教員が示した「小学校でみられる取組や場面等」を表している。

(1) 荒川区立南千住第二幼稚園での実施結果

共有の際に付箋を貼ることで作成された模造紙を掲載する。(表17)

観察した幼児の遊びの中で見られた姿について幼稚園教員と小学校教員が付箋に記入し、それぞれの付箋を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に分類しながら共有した。表17は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に分類された状態を表している。

ア 成果

共有を行った際には、幼稚園教員からは、「ボールを自分で選ぶことで、自分がやりやすいボールで遊べるようにする。」という環境構成についての意見が出たり、小学校教員からは、「様々な形態のボ

ールを扱えるようにすることで、ボールを扱う感覚が身に付いていき、小学校でもボールを使った運動ができるようになる。」という意見が出たりして、それぞれの教育活動のつながりについて理解を深めることができた。

表 17 1 回目の合同研修時に作成された模造紙（抜粋）

<p>【社会生活との関わり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★ルールを理解して参加していた。 ●とび箱を増やす手伝い→助け合い ●友達と一緒に遊ぼうと言う→リーダーシップ <p>友達の良いところを認める学級活動</p>	<p>【自然との関わり・生命尊重】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★友達が蝶を捕まえるのに参加する。 ●チョウに興味を示す。 <p>秋の生き物</p>	<p>【豊かな感性と表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★当たってくやしい、捕れなくてくやしいという素直な気持ち ●ボールの固さ、大きさ、とび箱のやわらかさ→素材に親しむ力 <p>環境面→遊びの広がり</p>
<p>【健康な心と体】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★疲れたから中当てから抜ける。 ●休憩する、やりたいことを選ぶ。 ●投げる、蹴る、とめる等、ボールの基本操作 <p>運動に親しむ心</p>	<p>【言葉による伝え合い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★「こっち」「僕のだよ」と自分の思いや気持ちを言葉に出している。 ●上手にできた友達に「おー」と声をかける。 ●「せーのでボールを蹴ろう」と伝える。 	<p>【自立心】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★とび箱の三段にチャレンジしてみようとする。 ●何度もボール蹴りに取り組む→粘り強さ
<p>【道徳性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★ルールを守ろうとしている。 ★ボールを片付ける。 ●「〇〇くんが先だったよ」と公平に判断している。 <p>ルールを守る規範意識</p>	<p>【数量・図形、文字等への関心・感覚】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★長い針が4になったらと言われて時間を意識する。 ●遊びから片付けへ時計を見て動いている。 <p>時計の学び</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●ボールの動きを予測→思考力？ ●とび箱二段から三段がいい→選択する力 ●「タイヤ跳び」を一つずつから一つ飛ばし、両足、片足→どうやったら楽しくなるのか遊びの工夫をしている。→思考力 <p>※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」以外の付箋の内容</p>

表 18 1 回目の合同研修における振り返りシートの記述内容（抜粋）

幼稚園教員	これまで小学校教員方々と、一人の子供についてじっくりと話すことは無かったが、このように話していくことで互いの教育方針や考え方を理解することができるのではないかと思います。
小学校教員	子供たちの「学びたい！遊びたい！」という自然発生的に生まれる意欲を大切に、単元計画や日々の授業を組み立てる重要性を改めて感じた。

合同研修を通して得た学びが、自身の指導改善につなげていく姿勢を見て取ることができた。また、「単元計画」との記述から、自身のカリキュラムと関連付けて考える視点を得ていることが分かる。

イ 課題

共有の際、幼児の遊びの場面ごとに模造紙を区切るのではなく、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で区切られてしまい、幼稚園教育と小学校教育の学びの連続性を深めるには不十分であった。

(2) 江東区立つばめ幼稚園での実施結果

共有の際に付箋を貼ることで作成された模造紙を掲載する。(表 19)

表 19 2 回目の合同研修時に作成された模造紙（抜粋）

戦闘中ごっこ（1回目）	鉄棒	戦闘中ごっこ（2回目）
<p>【健康な心と体】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★多様な動きを楽しんでいる。 ★やりたい遊びを継続して遊んでいる。 ●ボールの投球動作や捕球の扱いが良い。 ●ガムテープのボールを何度も繰り返し投げ <p>体育</p>	<p>【言葉による伝え合い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★途中で仲間がいなくなり悲しい、くやしい思いを味わい、その思いを仲間に伝えようとしていた。 ●いろいろな先生に話しかける等、コミュニケーション力がある。 <p>学級会（話し合い活動）</p>	<p>【協同性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★一緒に遊んでいる友達を認識している。 ●周りの子どもたちが「いれて」→「いいよ」「仲間ね」
<p>【自立心】 【道徳性・規範意識の芽生え】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★モルモットのケージの扉をボールで壊してしまっただが、一度遊びを止めて自分で直した。 ●ボールがモルモットのケージに当たり、入口が外れたが、自分で取り付けた。→自力解決 <p>道徳</p>	<p>【自立心】 【思考力の芽生え】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★逆上がりにも挑戦していた。 ●逆上がりにチャレンジして助言を受けるなど、主体的に取り組んでいた。 ●何度も挑戦し、諦めない力がある。 	<p>【思考力の芽生え】</p> <ul style="list-style-type: none"> ★教師が段ボールを盾にすると、自分も盾にするなど、他者からの刺激でアイデアが浮かんでいる。 ★楽しくするため、もう一つボールを作るなど工夫している。 ●先生に当てるため、遠くからねらったり、周囲を見たりしている。 <p>特別活動</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・やりたいこと ・取り組む姿勢を価値付ける。 ・易→難になるよう軽重をつける。 ・苦手と思わせない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場の設定 ・自分で伝えさせる。 ・見通しをもたせるための計画 	<ul style="list-style-type: none"> ・古新聞紙で新しいボールを作ろうとしている。→算数・図工・生活科

前回の検証実施園で出た課題から、共有の際には、観察した幼児の遊びについて、表の上部に示した遊びの時系列を予め確認してから、その時系列に沿って付箋を貼るよう改善した。

また、協議の際には、それぞれの遊びの中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で分類ができるように付箋を張り替えながら協議を行った。表 19 は、協議が行われた後の模造紙の状態を表している。一番下の一行は、話し合いを行う中で出た幼稚園教員の視点や小学校への広がりについて、付箋ではなく模造紙に直接書かれた内容を表している。

ア 成果

共有の際には、幼稚園教員から、「ルールを作るときは、子供の困難さを聞きながらルールを作ること、必要感をもたせる。」や「笑っていたが、本当に笑っていたのかを考える。」などの発言があり、幼稚園教育における個別最適な学びを実現しようとしている視点を合同研修内で共有することができた。

また、合同研修に参加した幼小の教員の振り返りシートの記述内容をまとめた。(表 20)

表 20 2 回目の合同研修における振り返りシートの記述内容 (抜粋)

幼稚園教員	幼児期の遊びは、小学校以降の教育につながっていると思うが、思っていた以上に様々な視点があることに気付いた。
幼稚園教員	幼小の接続についてたくさん話し合いができたので、スタートカリキュラムについて話す、作ってみるなどもできると思った。
小学校教員	幼児が確実にできる活動を設定し、できたことを認めること。「できた」「できない」ではなく過程を認めることなどを大切にしていこうと思った。

幼稚園教員が小学校の視点を理解する場面や小学校教員が幼稚園の視点を理解する場面を見ることができた。また、「スタートカリキュラム」について触れられていることから、この合同研修がカリキュラム編成につなげる方策として、有効であると考えられる。

イ 課題

今回の検証でも、学びの連続性という観点での話し合いが不足していた印象がある。小学校との連携課題にも挙げられていたように、幼稚園教育と小学校教育の学びの連続性について話し合うには、互いの教育内容への理解が不十分であったと考える。そのため、今回の合同研修とは別に、小学校における授業観察等を同様の方法で行うことでより互いの理解が深まれば、より子供の学びの連続性を意識できるようになると考える。

(3) 世田谷区立八幡山幼稚園での実施結果

共有の際に付箋を貼ることで作成された模造紙を以下に掲載する。(表 21)

表 21 3 回目の合同研修時に作成された模造紙 (抜粋)

感情のコントロール	協同性	コミュニケーション力
★【社会生活との関わり】ドッジボールで負けた後で砂場で気持ちを切り替える。 ●負けてゲームから抜ける。 ●外野が投げなくても待つ。	★【協同性】ルールのある遊びを楽しむ。 ★【協同性】納得いなくてもゲームを先に進める。	★【言葉による伝え合い】「俺外野」「じゃんけんしよう」「〇〇がんばれ」 ★【豊かな感性と表現】楽しい気持ちを表現する。 ●「ほしい人、手を挙げて」 ●ボールを取り合う友達の仲裁に入る。
思考力	ルール・道徳性	表現力
★【思考力の芽生え】「～だから～」という発言 ★【言葉による伝え合い】じゃんけんでは負けた友達には、待っていたという理由を説明して多めに砂をあげる。 ●いろいろな条件で空気の実験をする。 ●メガホンの口に土を詰めて、空気の動きを確認する。	★【道徳性・規範意識の芽生え】当たったら外に出る、線の外からボールを投げる。 ●じゃんけんでボールを取る。→ルールの理解 ●「入れて」他者と関わるときのマナー	●いちご作り、砂の性質、水の性質の理解 ●いちごに見立てた作品を作り、先生に渡す姿より、素材や用具のよさを生かした表現と想像力
知的興味	情報活用	運動
●水にメガホンを入れて「空気が通った。」(物理への興味)	●ボウルに砂を入れ、泥水をバケツに入れる。(順序立て・道具の使い分け) ●道具を目的に応じて選ぶ。	★【健康な心と体】ボールアウトしたボールを素早く取りに行く。 ●ボールを目で追う。 ●左右に動き、ねらってボールを投げる。

今回は、前回までの検証実施園での課題を踏まえ、幼小のつながりを参加者全員がイメージしながら話し合える工夫として、共有の際、遊びの時系列に沿って貼った付箋を、改めて類似した「力」で貼

り直しながらまとめた後に、それぞれ新しいカテゴリー一名を付ける作業を行った。

表 21 の点線の上部の内容が、付けられたカテゴリー一名を表している。その後、各カテゴリーに示された力が小学校教育ではどのような場面や役割で生かすことができるのかを小学校教員が伝えた。

ア 成果

今回、観察した幼児が育成した力について話し合う時間がより多く確保できたため、幼稚園教員と小学校教員が互いの教育観、指導観などの視点について深く理解することができた。

表 22 3 回目の合同研修における振り返りシートの記述内容（抜粋）

幼稚園教員	一人の幼児への理解を、その幼児の育ちつつある場面としてプラスに捉えることができた。その子の良さを小学校生活の中で生かしていく視点を得ることができた。
小学校教員	「おどける姿」が豊かな感性、「～だから～」という表現が思考力の芽生えなど、幼児の動きの意味について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を知ること、自分では思いもよらない視点を得ることができた。

振り返りシートの記述内容からも、それぞれが互いの視点を得ることで深く理解した場面を見て取ることができた。（表 22）小学校教員にとっては、3 回の検証全てにおいて幼稚園教員の視点、特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解している姿が見て取れた。

イ 課題

今回の検証は全て幼稚園で実施したため、幼稚園教員が小学校教育への理解を深めるための小学校で行う合同研修の実施が課題として残った。

5 合同研修を踏まえた小学校教育との円滑な接続に向けた方策

検証実践も踏まえ、本研究では幼小の円滑な接続を見据えた指導の工夫と改善に向けて以下のような方策を提案する。（図 36）

1 回目	2 回目	3 回目
会場：幼稚園	会場：小学校	会場：幼稚園又は小学校
内容：合同研修	内容：教科等の実践及び協議会	内容：今後の連携について
目的：当該幼稚園の幼児の観察から、幼小の教員の視点の共有を図る。	目的：幼稚園教育の成果を基にした授業改善に取り組む。	目的：持続的な連携に向けた取組（カリキュラム開発等）について協議を行う。

図 36 幼小の円滑な接続を見据えた教員間の方策

この方策は、幼稚園教員の 5 歳児の担当と小学校教員の第 1 学年担当を対象とした年間の合同研修案である。1 年間で 3 回の研修を行い、1 回目は、本研究で検証した合同研修を行い、幼小の教員の互いの教育観や指導観等を共有する。2 回目は、小学校において授業観察を行い、幼稚園教育の視点を小学校の授業改善につなげていく。授業観察においては、幼児の遊びの現状を考えると小学校の体育の授業を観察することが適当であると考えられる。

2 回目の内容を行う際には、連携の時間の確保が課題として挙がっていたため、小学校教員が作成した学習指導案に幼稚園教員が、学習内容と類似した幼稚園での実践とその実践を行う際の視点を記入することで、直接の交流時間が確保できなくても、小学校教員が授業改善を行えるようにする方法が考えられる。実際に本研究では、幼稚園教員に小学校教員が作成した体育の学習指導案を渡し、各園での類似の実践とその実践を行う際の視点を記入してもらった。（表 23）

このような取組を行い、幼小の教員が互いの教育観や指導観、実践事例等を共有することを通して、3 回目の研修では、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの開発を行うことが考えられる。

表 23 幼稚園教員が学習指導案に記入した幼稚園での実践事例及び教員の視点（抜粋）

学習内容	学習指導案に記入された幼稚園での実践事例及び教員の視点
体ほぐしリズムダンス	分かりやすいように、大きく体を動かす。安心して取り組めるよう、個々と目を合わせる。
猛獣狩りに行こうよ	大きな動きができるよう、「ドンドコ…」のところでは大きなジャンプをするなど、教員自身が見本となる。数への興味をもてるよう、動物の名前の文字数を視覚的に示す。
動きかた～あっちからこっち編～	転がる動きは、普通の遊びの中では出にくいので、マットを使って経験できるように環境構成することが多い。

第 6 調査研究のまとめと今後の課題

1 調査のまとめ

幼児の運動能力については、種目別に見ると、以下のような結果であったことを明らかにした。

- 「25m走」は第 1 回調査からほぼ横ばいで大きな変化は見られない。
- 「立ち幅跳び」及び「ソフトボール投げ」は、男児は低下傾向で、女児はほぼ横ばいである。
- 「体支持持続時間」は、男女共に低下傾向である。
- 「両足連続跳び越し」は、男女共にほぼ横ばいであったが、今回調査で大きく低下したため、継続的な観察が必要である。

2 小学校教育との円滑な接続に向けた指導の工夫と改善

今回の研究では、幼稚園教育要領に示された視点に立ち、幼稚園教員と小学校教員が互いの教育観や指導観等を共有し、円滑な接続が図れるような方策を提示することができた。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有する視点を実践の中に組み込むことで、小学校教員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への理解を深める方策となっていることが、検証により明らかとなった。

3 今後の課題

(1) 幼児の運動能力の継続的な把握と分析

第 1 回調査と比較すると、運動能力の数値は依然として低位で推移しているため、今後も継続して調査を行うことで幼児の運動能力の傾向を把握し、原因の分析を行っていく必要がある。特に今回の調査の中で「両足連続跳び越し」は、前回調査から男女共に大幅に低下したことから、その動向を注視する必要がある。

また、今後も東京都の幼稚園・こども園において成果を上げている取組を収集し、オンラインを活用した情報共有など、普及・啓発していくことで、東京都全体での質の高い幼児教育の推進を促していく。

(2) 本研究の更なる充実に向けて

本調査研究においては、幼小の円滑な接続を見据えた指導の工夫と改善の方策として、幼小の教員による合同研修の方法について提案した。調査対象となった幼児が、今後小学校に進学することを考えると、幼稚園での幼児の課題を小学校教員が理解しておくことは大切である。小学校教員は、幼稚園での実態を把握し幼児教育の成果を踏まえた指導を行うことで、小学校の教育課程や学習指導の在り方の改善・充実につなげることが重要になってくる。本研究で提示した合同研修及び年間の研修計画がその一助となるよう、今後広く東京都全体で共有していくことが課題となる。

また、今回の研究では検証を実践したのが幼稚園のみであった。そのため、提示した年間の研修計画等をより良くするためには、小学校における検証が必要となってくる。その際には、幼稚園及び幼稚園と連携している小学校で今回提示した研修計画を実践し、アプローチカリキュラム及びスタートカリキュラムの開発までの流れを提示することが求められる。そして、幼小の持続的かつ円滑な接続を達成することを目的に、カリキュラム・マネジメントの考え方に基づいた教育課程の改善・充実及び幼小 9 年間を見通した幼児教育の更なる充実へ資するよう、今後も研究を進め提言していく。